
花鳥風月～花よりも華～

佐保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花鳥風月〜花よりも華〜

【Nコード】

N8012Z

【作者名】

佐保

【あらすじ】

神話と魔法が息づく島国・秋津島。

現代日本に良く似た世界で、魔力・神力に縁のない、できれば一流企業のOL目指す少女が、16歳の時を境に国の最重要人物に抜擢。本人には悲劇で苦勞ですが、周りには十割喜劇。貴人に振り回される彼女の未来はどこに行くやら…。

そんな愉快な日常を楽しんでいただけたら幸いです。

「人生、諦めが肝心だと思っよ」

「諦められるかっ、アンタたちっ、私にこれ以上迷惑かけるとっる

すわよっっ!!...このバカあああ!!...」

私は両親はいないが、下に弟妹合わせて4人抱えてる、ごくごく普通の16歳の女子高生だ。

ある一面においては「普通」というには若干憚られる習い事をしてて、その師匠が後見人になってくれているので、孤児として暮らさなくても済むのが幸いだが、それを除けば本当に普通以上の何者でもない単なる高校生だった。

そう、過去形になってしまつのはどうしてなのか、私が一番知りたいわ……。

「よしっ、柚月、美夜、陽花、夕鶴、起きなさいーっっっ!!!」

息を吸って、ご近所迷惑にならないくらいの大声で、上から順に名前を呼ぶと、まず中学生は14歳コンビの美夜と柚月が起きて来た。

「はよ、雅姉」

「おはよ…雅姉さん。あ、柚月。チビたちいないわよ」

「ホントだ。すぐ、起こしてくる」

Uターンした柚月が隣の部屋を開けると、小学生8歳コンビの陽花と夕鶴を両脇に抱えてやって来る。

「おはよーですう」「」

美夜はその間に、私が洗濯機に放り込んだ洗濯物を干し、夕鶴と陽花はお皿を出したり、箸を出したりする。

私を筆頭に、男女の双子が二組で、これが私の家族だ。

そして賑やかな朝食はきちんと「いただきます！」から。

「今日の夜はハンバーグにしようと思ってるんだけど、ダメな子いる？」

「あれ、雅姉つては遅くなるんじゃないか？」

サラダをつまむ行儀の悪い柚月の手をぺしつと叩く。

お姉ちゃんはしっかりと見てるのよ。

「んー。ほら、私16歳だから、そろそろ『アレ』があるのよ。何準備すればいいのかあまりわかってないから、師匠に聞いておこうと思ってるね。練習せずに帰ってくるから、そんなに遅くはならないつもり」

「ああ、アレね」

「アレかー。姉さん、また一週間もいなくなるのね。寂しいわ」

柚月と美夜がなるほどね、とうんうんと頷きあつと、ちび二人が私のスカートを引っ張る。

「ねーちゃ、どこいくんだ？ゆづ、おいて。ひでーよ」

「そーだ、そーだ。よーかもつれてってよ、ねーちゃ」

「…アンタたちがこのマンションで暮らせるのは誰のおかげかなー？」

私が問いかけると二人がはい、と可愛く手を挙げて答える。
こういうところは可愛いよね、チビたちは。

「みやびねーちゃんのおししょーさまの、ときわさまがこーけんん
をしてくれてるおかげです！」

「くにが「せーかつほごひ」をだしてくれてるおかげです！」

「よくできました。アンタたち、賢いわ！」

よしよしと二人の頭を撫でると、気持ち良さそうに笑うの。

私たち孤児には、国から18歳になるまで手厚い生活保護費が出る。

この国では、子供はもつとも貴重な財産とされているからだ。

マンシヨンは両親の保険でなんとかあったけど、生活費はどうしようもないので…正直ありがたい。

私はことあるごとに、小さい子でもわかるように、ここで暮らせるのは、私の師匠である常盤様が後見人になってくれていること、国が子供である私たちに生活保護費をくれていることを話している。

どちらが欠けても、私達は家族揃っては暮らせなかつただろう。

自分たちは一人ではなく誰かに助けられて生きていることを知ってほしいと思うからだ。

俺は一人でも平気で生きていけるぜつ、なんて未成年で金も稼いだことのないバカで自惚れた人間にはなって欲しくないのだ。

人に対する感謝の心がない人間は、ロクなものにならないだろう…私は愛する弟妹に絶対そんな人間になってほしくなかつたから、口を酸っぱくして教え込んでいる。

礼儀と愛想と正しい心があれば、どこでも愛されるだろう。

私は可愛い弟妹に、できればそういう人間になってほしいと思うのだ。

そこに世渡り上手というスキルを持ってくれたら、もう言うことなしだ。

「だから姉ちゃんはお国が仕事しなさいと言えば、しなきゃいけないのよ。世の中、タダでお金もらえるほど、甘くないんだから」

もらう権利もあれば、国民の義務だってあって…その一つが16歳の少年少女を集めた軍事訓練の参加だった。

ちなみに絶対参加なので拒否権はよっぽどを除いてない。

正確にいうと、野外訓練であって銃とかは持たないらしいが、どっちにしても山に籠ることはない。

16歳の次は20歳、そこから10年刻みで60歳まで計6回参加が義務づけられる訓練は、実のところ、皆がすごく楽しみにするものだ。

軍事訓練なのに楽しみつつあたりで間違っているような気がしななくてもないけど、きちんと理由がある。

それに義務をきちんと果たすのは理由がなんであれ、国民としていいことだと思うのよね。

権利を主張するなら、義務だって果たさなきゃ割りにあわないわ！

「あ、おねーちゃん。あきつしまこうだ！」

テレビの画面の奥では、ヴェールで顔はわからないが美しい笑みを浮かべた女性が、どこかの民に手をお振りになっている。

これが私たちの国主である秋津島公爵殿下。

この国、秋津島国にただ一人しかいない公爵位を持つ尊き存在が彼女であり、秋津島国の首都である皇都生まれの私は、その軍事訓練で秋津島公の祝辞と祝福を受け取ることができる。

ミーハー丸出しで申し訳ないけど、有名人は見てみたいじゃない。その心理だ。

そしてほぼ10割、軍事訓練に参加する人間は…公を見たくて参加するといわれている。

私も楽しみだから、気持ちはすごくわかる。

他の領地生まれなら、四候とか守護候とかく四神とか言われる、四人しか持たない候爵位を持つ東西南北の大諸侯の挨拶が見られるらしく、それはそれで見てみたい気がする。

噂によると、どの方もそれは見目麗しい方々らしいので。

「ねーちゃ。どーして、あきつしまこうはドレスもスーツもきれいなむらさきなの？」

そろそろファッションに興味があるらしいおませな陽花の言葉に、私が苦笑する。

「秋津島公の色だからよ。法律で定められているから、公爵以外は着ちゃダメなのよ。禁色っていうんだけどね」

「じゃ、じゃあ、よーかはみかちゃんのおたんじょうびにも、むらさきのドレスだめ？」

ガーン、とショックを受けた陽花に、慌てて私が言い添える。

落ち込むと陽花は後を引くのだ。どんよりキノコを生産しそうだから、それは鬱陶しい。

「それはいいのよ。着ちゃダメなのは、入学式とか卒業式とか、国の行事の時とかね。プライベートは構わないのよ。美夜が紫のスカート持つてるの、知ってるでしょ？」

「うんつ。みやねーちゃ、おしやれできれー！」

「まあ、陽花。なんてアンタは正直なの！今日は陽花の好きなホットケーキ焼いてあげるからね」

「やたつ！！はちみつ、たあつつぷりね！！」

うん、陽花。アンタもちやつかりしてるよ。しっかりしてるわー。家族のほのぼのしたスキンシップと会話を他所に、どこかの領主と会談している公を見る。

凜としていて、立ち居振る舞いも見事だわ、ホント。

この国にはいくつか禁色が存在していて、貴人以外が着れない色がいくつもある。

その最たるものが秋津島公の紫であり、特に今代の秋津島公は紫の中でも確か「藤色」を禁色とされたので、その色は徽章以外には使ってはならないルールになっている。

公式の場でうっかり使ったら、多分…社会的に抹殺レベルの冷や

やかさで見られるだろう。礼儀って怖いんだから。

勿論、公の紋章も「藤」だ。…下がり藤だったか、上がり藤だったかは忘れてしまったけど、まちがいなくそう。

(…っていつか、あの色ってはつきり言って人を選ぶから、普通の人間には無理だと思うけどな…)

着るといわれたところで着たくない色だ、まず似合わないもの…
絶対。

「…………ごちそうさまでした!」「…………」

もちろん、食事のしめくりはきちんと手をあわせて。

朝食は一日の基本だから、しっかり食べさせるし、好き嫌いなんて絶対に言わせないのだ。

手早く柚月が茶碗を洗って片付ける間、ちびたちはランドセルに入った教科書を確認し、美夜がチェックを入れていく。

「夕鶴、音楽の教科書ないわよ。陽花、今日算数じゃなくて社会でしよ」

「あ、リコーダーもだ。とってくるー」

「しゃかいのきょーかしよ、どこー? みやねーちゃ、かくした?」

「そんなわけないでしょ、早く探しておいで」

いつもの光景を横目に、窓に鍵をかけて、ガスの元栓も確認する。

そして準備の終わった全員が玄関に揃うと、一番出かけるのが遅

私が声をかける。

「今日も元気にいってらっしやいー!」
「「「「「いってきまーす」「」「」

桐生家の朝はいつもこんな感じである。

「桐生雅、参りました」

市街地の南にある高地に建てられた小さな建物は、女子しか習うことの出来ない「紅花流」の本拠地だ。

秋津島国のいたるところに看板掲げているから…まず知らない人間はいないだろう紅花流は、武道と礼儀作法の私塾だ。

基本的には武道なら体術から剣術までなんでも学ぶことができるし、ある程度のレベル以上なら馬術なども学べるのがウリ。

初級から中級までなら、皇都内に支部が幾らでもあるんだけど、私は師範代の免許を持っているので、他の師範代の人々と共にここで学んでいた。

力で男に劣ることが悔しかったらしい何十代か前の朱雀候が、弱い女性でも男に負けないような技を編み出ささいと…ある意味ではすごく難題な命令を下したことがきっかけとなって生まれたもので、護身術から始まって、師範代クラスになると宮廷作法なども学ぶことになる。

女性の護衛は女性の方がいいので、直々に声がかかることもあるらしいが…私みたいな子供に声がかかるはずもないので、今のところまったく役に立っていない。

まあ、ただで学べる礼儀作法と思えば、ガンガン頑張るけど。

だってね、礼儀作法に通じています、でひょっとしたらいいところに職見つけられるかも知れないし！

ちなみに普通の礼儀作法もきちんと教えてくれるから、ある程度になった女の子たちは、行儀見習いレベルで、いたるところにある支部に通わされる…というか、親が放り込む。

うちは美夜も習ってるし、陽花も今年から放り込んだ。

マナーくらいは学んでおいて損はないし、私の妹たちということでは授業費ゼロなのありがたい。

授業費がゼロならばしつかり元取って何かに役立ててやるわと意気込む美夜と、マナーはレディの第一歩と言いくるめられて喜んで通う陽花に、筋がいいと支部長のお褒めの言葉をいただいたこともしばしば。

中級免状まで持っている、と、礼儀作法上は完璧な淑女とみなされるので、大抵の花嫁さんはこの免状を持って嫁ぐんだそう。美夜と陽花の目標もここだ。

ただ、どっちも私を知っているからには上級免状は取らないだろうなあ……。実技試験だし…。

紅花流を愛しているお姉ちゃんはやっと寂しい…。無理強いはしないけど。

「いらっしやい、雅。こちらにおいでなさい」

チン、と涼しい音をさせて生け花を切っていた師匠が微笑んで、招いてくれる。

紅花流の頂点に立つ総帥である師匠は、見た目はたおやかな老貴婦人で、立ち居振る舞いも美しい私の憧れだ。

今もこれだけ美しいなら、昔はそれはすごかっただろう…きっと秋津島美人の代表だったに違いない。

「失礼します」

音をさせずに障子を開けて中に入り、障子を閉める。

そして師匠にたいして五点礼をすると、良く出来ましたと師匠がにっこり笑ってくれる。

私は師匠のその笑顔がとても好きなのだ。

褒めてもらいたくて、それはもうガンガンに頑張った過去の記憶が懐かしい…まあ、師範以上になれば、国に貢献できる人材という判子押されて、生活費が上乘せされるという事情も大きかったけどね。

ええ、大きな声では言えないけど、師範の免状取った次の月から生活費が1.5倍になったんだよ。すごすぎる！

「あれ、里香さんは？」

いつも師匠の傍に控えている懐刀の里香さんが見当たらない。

「ああ、里香なら、伯爵家の要請があったので護衛に出しましたの。私が行きたかったのにー」

拗ね拗ね、と唇を尖らせながら拗ねる初老の女性がこんなにかわいいなんてあり得ない！師匠、その可愛らしさは反則です！！

「伯爵だと華族ですよ。花族ならともかく、華族ってすごいなー」

この国は基本的に、庶民とは別に…花族とその上位である華族の二つの身分が存在する。

公爵である秋津島公は別として、候爵と伯爵が華族。

このクラスは基本的に国政をメインに動く人々であり、地方の領地を治めるのは花族と呼ばれる男爵（女爵）、子爵。

二つまとめて、花冠とも言う。

私からすれば「偉くて遠い世界の人」のカテゴリで一括りなのだが、あまたの貴賤を見てきた師匠に言わせると違うらしい。

「伯爵クラスだったら宮廷にも参内するでしょう？ちょっと宮廷の噂話も仕入れないとね」

たかが噂話、されど噂話。

やんごとなき人々の噂は単なる噂でとどまらない時があるらしく、それに紅花流が巻き込まれてはならないと師匠は考えているようだ。

やはり総帥たるもの、思慮深くなきゃいけないんだろうな…大変だ。

「……まあ、間違いなく巻き込まれるとは思っただけ……未だ茜の花も見つかっていないことだし…」

ぼそつと呟いた師匠の言葉に、私が「？」マークをつける。

茜？

「…茜つて、染料の茜ですか？」

私の疑問に、いいえと師匠が苦笑に似た笑みを浮かべる。

「秋津島公の剣のお名前なのよ、茜というのは。代々、秋津島公は自らの剣をお持ちなのだけれど、まだ現れてなくて…ですから今代の公は剣をお持ちでないの」

「…現れるんですか？剣が？」

「そう。ある日、突然現れるの。茜は本当に特別だから……。ところで水菓子が食べたいの。お茶を一服いかが？」

「喜んでいただきます」

紅花流と茜の剣と何の関係があるのかさっぱりわからなかったけど、師匠の濃茶は大好きなので、喜んで茶室に向かう。

今日のおやつはどこだろう？

菊やの花菓子、みむろの最中もいいな。

ちびたちに少しでも多く食べさせてあげたいから、いつもおやつを我慢してる身としてはここで甘いものを食べられることがありがたい。

昔は子供だったから、作法も知らずに手づかみでいっぱい頬張った記憶が懐かしい…今でも笑われるんだもん。

いや、今でも子供だけだね。

そして師匠の素晴らしい作法に見ほれた茶会で、結局「いつものように野生の木の実や薬草のことさえ忘れなければ大丈夫よ」と太鼓判押されて、私は家路についた。

ええ、ここではそういうのもすっかり叩き込まれるので、私キノコの判別も得意です。

あまり日常で役に立った記憶はないけどね。

賽は投げられた 01

そしてやってきた皇都の中央ドームは人、ヒト、ひと。
ともかく、老若男女、人でいっぱい。

こんな人を見たことなくて、くらくると眩暈がしそう。

一番最初に入場した人は一週間前から陣取りしてたそうで……それには流石についていけないわ。人の情熱って時にはいろいろなもの蹴散らすものよね……うん。

しかし、意外に16歳の子って多いんだなって思ったら、実は申請が通れば、17歳だろうと15歳だろうと、参加してもいいんだって聞いてビックリ。

それで毎年参加するつわものも結構いるとか……しかも召集された以外の人は実費なのに！私は絶対無理だ。

そんなお金があれば、私は迷うことなくチビたちの学費と給食費にするわよ！

「うらやましいです……実費で参加できるなんて……」

横で親切に教えてくれる、20歳前後のそれは素晴らしい美人で
ナイスな体型のお姉さまが頷く。

光に透けるとキラキラ輝く金茶色の髪は、海を越えたお隣の英香
国の血が入ったんだらうか。この国の黒髪の中では珍しい。

「一般の人は20歳からは10年おきだけど、花冠は最低5年おき
に参加しなきゃいけないの。それが「高貴なる義務」だから」

紅薔薇花音と名乗ったくるくるの巻き髪が似合うゴージャス美人

が、面倒くさそうなため息を吐く。

(花の名前がついているから、花冠だろうとは思ってたけど…)

この国の花冠は<花>の名前が家名につき、勿論紋章も花をかたどったもので、それはこの国の女神の神話に關係するものだ。

しかし身近で見たのは初めてで、しかもすごい美人さんなのでビックリだ。

ご本人は親しみやすい人柄なので、花冠の印象は180度変わったけど…。

「5年ごとに山籠りか…大変ですね…」

「ホントよねー。遊んでるように見えるけど、花冠はみーんな義務がいつぱいなよ。でも、この訓練は遊びの範疇だけだね。炊飯で炊くご飯は楽しみだわ」

私、野外訓練って好きなの、と嬉しそうに言い切る花音さんは、やっぱりなんか違う気がする。

「ホント、ご飯は美味しゅうございますものね」

後ろからうふふ、と淑やかに現れた秋津島美人に、うおつとたじろぐ。

花音さんが英香国の血が混じった西洋美人なら、この人は生粋の秋津島美人代表だ。

腰まであるぬばたまのような黒髪はどこまでもまっすぐなさらさらストレートで、立ち居振る舞いも美人の見本のような淑やかさ。

二人揃うと眼福だわー。

西洋と東洋の美人代表！みたいな感じで、本当に絵になるの。

たとえジャージであろうと、まったく損なわれない美人っぷりは素晴らしいわ！

「竜胆詩織と申しますの、お名前を伺っても？」

「桐生雅です。えと、竜胆さんも…花冠？」

「うふふ。竜胆家ですもの。でも詩織とお呼びになつて。雅さんと呼びせていただきますから。私もご飯が楽しみです。焼きおにぎりを作るつもりですわ」

「ああ、あれ香ばしいわよね。私も作ろうかしら、なかなか食べられないし」

「ですわよね。私、とても楽しみですのよ」

どこかにじいやとばあやがいても私は驚かないぞ、この二人ならうふふ、おほほと笑う様が似合いますぎていて、「ああ、この人たち高貴な人なんだー」と思わせる何かがある。

まあ、そんな人たちにもきちんと義務が発動されているようで何よりだ。

権力つてのは上から腐るってよく聞く話だし。

賽は投げられた 02

三人でたわいもない話に興じていると（詩織さんと花音さんのせいで、私の周りはエアポケット状態だったので逃げることできませんでした…ええ）、子供を抱いた男の人が近づいてくる。

40代後半くらいかな…渋い雰囲気のナイスなミドルグレイ！！私の好みにジャストなおじさまに、ちよつとクラツとする。

やはりね、男は年を得てナンボだよ！というと、美夜と袖月にはいつも白い目で見られておしまいなのが切ない。

でも、美夜の好きな男性アイドルたちって若すぎて、弟みたいなものだからきゃーきゃーミーハーな気持ちにはなれないのよね。

しかも、ロマンスグレイに抱っこされた子供は夕鶴と陽花より少し年上だろうか…またなんて愛らしいのか。

（男の子…だよねえ？かーわいい）

ミドルグレイの息子さんなら、きつと奥様も美人に違いない。でもちよつと年の離れた若い美人希望です…なんとなく。

「詩織嬢、花音嬢。ここにいたんですか」

「お姉様方、急にいなくなるから探しました」

どうやら二人の知り合いらしい…つまり花冠か、この人たちも。花冠って顔のいい人しかいないのか、うらやましいわ。

「ああ、お友達になりましたの、こちら桐生雅さん。おじさまも雪

も、名前で呼んで差し上げてくださいな」

詩織さんの捌けた言い方に、二人が私をじーっ、と見ると、すぐにつっこり笑う。

笑うと、またすぐいい感じだわ、二人とも。

「はじめまして、雅お姉様。白椿雪博と申します。僕もぜひ名前で呼んでください。よろしくお願いします」

「ごきげんよう、雅嬢。私は立葵宗徳と申します。よしなに。私は可愛い娘さんには「おじさま」と呼ばれたいな」

「桐生雅です。よろしくお願いします」

ぺっこりと頭を下げる。

そうか、雪博くんとおじさま…（なんか呼びなれなくて恥ずかしい）は親子ではないのか。

しかも、やはりとってもフレンドリーだ。

「……………ん？」

あれ、ちょっと待て。

竜胆の花は青、紅薔薇は当然赤、白椿は白、立葵って黒じゃなかったっけ？

「あの…皆様、皇都花冠ですか？」

花冠の姓である花の色は、基本的にそのまま領地に直結する。

東方・青龍領の青、南方・朱雀領の赤、西方・白虎領の白、北方・玄武領の黒。

これらの色が鮮やかな花は基本的に、その領地の人間である可能性が高いのだ。

まあ、そうでない花冠たちもいるけれど。

「いいえ、私たちは東西南北の諸侯ですわ。でも用事ついでにここに受けますのよ。花冠はどこで訓練してもいいことになっていますから」

詩織さんの、さも当たり前と言いたげな言葉に感動した。

「そうですね。いろいろ仕事があつて、でも他所にいたら大変ですものね」

崇高な義務を果たす花冠というイメージを持ちかけた私に、花音さんの追い討ち。

「それに、秋津島公を見れるチャンスは逃す手はなくてよ！」

うんうん、と全員が頷く。

おんやー？私のイメージが崩れていくのは気のせい？

「……皆様も10割の一人なんですな……」

そうか、花冠もミーハーなのは変わらないんだわ…すごいぞ、秋津島公。

賽は投げられた 03

シャラン、シャランと水晶琴の音が聞こえると、お喋りしていた皆の音がぴたりと止み、一斉にみんなの視線がはるか遠くにある壇上に向かう。

（軍人が水晶琴持つんだ…。あれ、ひよっとして軍属の神官かも）

目深に被った帽子と制服は軍人の深紅だけど、たすきのような綴は純白で、しかも水晶琴を鳴らせる人間は基本的に神官だと聞いたことがあるから、めったにいない軍人で神官という、器用な二束のわらし履いた人かも知れない。

神官は、文字通り神殿で働く人で、建前は女神に仕えていることになっているけど、最高位は確か秋津島公だったはず。

神力と呼ばれる治療力を駆使して、軽い怪我とかなら即座に治すことができるので、どちらかといえば町の便利屋さんに近いかも。ただ、そういう性質の力を持つということは、人柄も温和で優しい人が多いので、どちらかといえば暴力に属する軍人とは相容れない。

それにものすごく神官は数が少なく、万が一神力があると認められたら、即座にスカウトが来ると聞いたことがある。

耳に挟んだお給料がすごく良かったのよね…試しに師匠のお知り合いの偉い神官様…しかも位は上から二番目の枢機卿下だ！…に見てもらったけど、残念なことに私には神力はなかったらしい。

その後、二人で長い間こそこそ話しこんでいて、何故か師匠が「

おーほっほっほ、雅は渡すものですか！この子は紅花流のものよ！と高笑いしていた…何故だろう？

神官様の「おーのーれー、このアマ！！」といわんばかりのプルプル震えた怒りの態度が怖すぎて、聞けなかった…いや、ホントに怖すぎて。

全人口の0.01%しか持っていない神力も日々の訓練で増幅するものらしく、結局は何するにしても訓練がものを言うのだと感心した記憶がある。

ちなみにその枢機卿猥下が、万が一師匠に何かあった場合は私の後見人に指定されている…師匠に押し付けられたんだらうな、気の毒すぎる。幼馴染とはいえ…。

ともあれ、半年に一度は顔見世兼ねて神官様のところに通うと、いつも嬉しそうに出迎えてくれるのが申し訳ない。

おやつにつられてるなんて、死んでも言えない…美味すぎるからだなんて。

でもそれを除いても、神官の色々な話を教わるのはとても面白く、水晶琴の話も聴いたことがあったのだ。

ちなみに琴といつているけど、見た目は男の人の背よりも高い長さの優美な杖で素材はそのまま水晶。

持ち手や金具は金で固定してあるけど、貴金属や水晶は神力と相性がいいらしく、基本的に神官の持ち物は、ものすごく細工が優美で…こつこつのもなんだけど、高価なものだ。

勿論、水晶琴も例に漏れず…てっぺんには七色に輝く正円の握りこぶし大の宝石がはめこんであって、その周りを大きさ違いの環が

くるくる水平に回っている。

その水晶の環同士がぶつかる時に鳴るんだけど、それが琴の音みたいだってことで水晶琴と言われている。

しかし、そもそもこれは一般人が持ったところで鳴らないどころか、環が浮かない。

一度触らせてもらったけど、うんともすんとも言わなかった。

神力を手順を踏んでこめないと、動かないのだそうだ。

つまり、第一段階の「神力をこめる」という時点でアウト。今の神官さんみたいに持った瞬間は水晶琴がキラキラ輝いたんだけど、すぐに消えたのでガツカリした思い出がある。

あのキラキラをずっと維持できてこそ、神官の極意なのだ。

懐かしいな〜と見ていると、水晶琴の音が大きくなり、最後にシヤンツ、と大きな音を鳴らし、彼が口を開く。

「女神が愛し慈しみ、今も守りたもう秋津島における、<皇すめ>の代理人たる秋津島公爵殿下のご入来。みなのもの、心して拝聴せよ！」

マイクも使っていないのに、すごい音量！私、ドームの後ろの方にいるのにしっかりと聞こえるよ。

賽は投げられた 04

そして、とうとう壇上に藤色のドレスを着た秋津島公が現れる。

顔を覆うヴェールまで藤色なんて凝ってるなあ……と思つてると、真紅のルージュを引いた美しい唇が微笑んだ。

ヴェールの中身は見れないけど、秋津島公は絶対に美人だと思うの！

『我らが女神の恩寵を受けし花よ。国統べる<皇>の愛しい花よ。妾…秋津島公爵は女神と<皇>の名において、そなたたちを祝福する』

<皇>というのは、女神の息子とされていて、世界を支える存在といわれている方だ。

ヒエラルキーは女神 <皇> 秋津島公、となるみたいだけど、女神様は神様だし、<皇>も息子つてことは神様だろうから、どんなに遠くても存在がある秋津島公が一番偉いんじゃない？と巷では思われている。

『さあ、妾が祝福を受けられよ、ここに集つた勇敢な花たち』

麗しい仕草で公がいつも持っているダイヤのついた錫を振ると、私たちの頭にキラキラと光る祝福の祈りが降り注いだ。

日曜日に向かう神殿で受ける祝福と同じ、しかしそれよりも遙かに大きな祝福の祈り。

伊達に神官たちを束ねてはいないと初めて知る、公爵の神力。

魔法…花冠の適性である魔力を持つ人間が使えるもので、秋津島公は直接私たちの魂に語りかけながら、神力も使えるなんて、本当に秋津島公は特別なんだと思ひ知る。

この国を統べる、わが国で最もかけがえのない御方。

そして指を組んで目を閉じ、女神の恩寵と秋津島公の祝福を受け取る。

噂に聞いたとおり、キラキラ光るものに触れると、なんだか暖かく優しい気持ち満ちた。

もういない母親に抱きしめられているような、そんな優しさは…
ついつつかりすると涙が出そうになる。

『さて、集いし妾の愛しい花よ。そなたたちは一週間とはいえ、この訓練にて普段の生活では得られない叡智を身につけよう。妾は秋津島の花たるそなたたちが、その知恵を隣人に対する優しさで使うことを願ってやまん。そして願わくば、そなたたち花がこの訓練で得た知識を生かすような危険に陥らんこと、妾は心より願うておるぞ』

頭の中に響く玲瓏とした声は、天上の音色のごとく皆の心に響き渡る。

遠く、近く…まるでさざなみのよう声は、幻想的に美しく。

公の声は、まるで子守唄のようでいて、どこか懐かしい。

魔力で増幅された声つてのは、皆こうなのかな…綺麗でやさしくて、力強い。

数万人がいるというのに、しわぶき一つないドームは、秋津島公

の声を聞き逃さないようにと皆が必死だ。

『そして妾が花よ、そなたたちは三人で組むことになるうが、どの組も縁深き者たちなり。一週間、力を合わせ、困難に立ち向かい、その困難を克服せんことを祈る』

軍事訓練は、くじ引きで選ばれた三人一組で一週間を共に過ごすというもので、最初はくじ引きと聞いて…役人たちのいい加減っぷりに眩暈がしたが、聞けば秋津島公直々に魔力をこめて、自分の縁に一番つながる人間同士がくつつくようにしてあるんだって。

だから事前にもらった残り二人の名前の人とは、縁があるということだ。

ただし念は押された。「けっして相性がいいってことじゃないからね」と。

いくら縁が深いからって、仲良しになれるとは限らないらしいので…そこは上手くやってねということらしい。

やっぱりいい加減かも……。

『さあ、女神に祈ろう。そなたたちが怪我なく一週間を乗り切ることを』

秋津島公に促され女神に祈りを捧げている間に、彼女が壇上から降りて見えなくなる。

そして私は詰めていた息を吐いた。

思っていたより、すごかった…なんていうか、迫力あるっていうか。

ちょっとだけ、ヴェールで顔が隠れるなら影武者もいたりしてね

「、なんて思っでごめんなさい！無理っ、普通の人間には影武者務まらないって。あの存在感、出せないから！」

「ふふ、初めての秋津島公の祝福を受けた感想は？」

「迫力です！すごすぎ…手に汗掻いちゃいました。あれですよ、絶対に勝てない存在があるとしたら、公がそういうものだと思います。戦う前からもう未来はわかってるよ！的な」

花音さんの問いかけに私が答えると、皆が模範解答を外されたような変な顔をしていた。

ん？なんか間違ったかしら？

「普通そこで強い、という言葉はあまり出ないので…。大抵、公の容姿や声のことで」

おじさまが苦笑して笑うと、皆もうんうんと頷く。

容姿はすごく美人、声はすごく綺麗…こんなこと、当たり前すぎて感想にもならないと思うんですけど……???

「でも、雅さんのそういうところは好ましいですわね」

「そうね、可愛いわ、雅」

「とても得がたい資質だと思います」

うんうん、と皆が何故か納得しているんだけど、まったくわからない。

ふと気づくと、前の列のほうがざわつき出した。

「ああ、そろそろ組分けですか。どなたと組むか楽しみですね。私

はこれが大好きでね。違う思考、違う環境ゆえの感覚。会話するととても新鮮です。自分では得られないものですから」

楽しそうに笑うおじさまに、この人はものすごい柔軟な思考を持っているんだろうなあと思った。普通、そんなこと思わないから。むしろ不安たっぷりだよ…どんな人と一緒に組むのかわからないし。

「学ぶこともたくさんあります。僕は特に幼いから、もっともっと色々な人から学ばねばなりません。こういう風に見知らぬ方と組む一週間は僕を成長させてくれます。ありがたいことです」
すごい、優等生の台詞だ。

「雪博くん、いくつ?」

「今年10歳になりました」

「弟や妹と2つしか変わらないのに………すごいわ、雪博くん!」

ああ、あの甘えん坊たちにこの台詞聞かせてやりたい。
でも、環境かも…花冠は責任があるし。

「雅さんは今回どなたと組んでいらっしやいました? 組めるものなら、私も雅さんと一緒にしようございますのに、お相手が羨ましいことですわ」

「ホント。一緒に遊びたくてよ」

なんか、すごく嬉しいな。

社交辞令でも、こんなこと言われて嬉しくない人間はいないよ。
遊びたい、はきれいにスルーするけど。

「えーとですね…多分知らないと思うんですけど、香月藤緒って人

と、斎孝弘という方です」

「」「」「」.....「」「」

瞬間、皆が笑顔のまま凍りついたのに私がビククリした。
え、なにその反応!?

「む、無効ですわっ。こんなのずるいですわ。ひどうございますっ」

ええっ、ちょっと詩織さん、どうしたんですか?!

「ずるいわよっ、ひどい!! 私たちだって雅さんとご一緒したいのにつ!!」

ずるいずるい、と花音さんがぶくつとほつぺた膨らませてぶんぶん拗ねるんだけど、すごく可愛い!!

「しかしお姉様方。くじは公平ですから…もうこれは雅お姉様の引きがいいというか、悪いというしか……」

えっ、ちょっと!! いいの? 悪いの? どっち!!

「……秋津島公が仰った通り。お二人と縁が深いのでしょうか……それは注連縄のように」

「なんで、注連縄なんですかつ、おじさま!!」

とうとう突っ込んでしまった私に、皆が複雑な視線を向ける。

いろいろ感情が入り混じって読めないくらいに複雑っぱい…なんで!!?

「やーだーなー。四人とも勢ぞろいして。私にも紹介してよ、可愛いお嬢さんを」

ひょいと現れたのは、見たことのないくらいの美少年。

花音さんとも違う亜麻色の髪。

これは、絶対に美夜がきやーっつ、と黄色い悲鳴をあげるはずだ。ビックリするくらい的美少年だもん！

サイドだけが長いショートカットのすらっと背の高い美少年に、四人がうやうやしく頭を下げる。

「ごきげんよう、藤緒様。麗しの御方」

「ごきげんよう、朱の姫君。貴方はそのような姿でも美しい。蒼の姫御前も麗しく」

「ご機嫌麗しゅう、藤緒様。本日も凜々しゅうございますな」

「ごきげんよう、黒の宮。おじさままで失礼だよ」

「ごきげんよう、藤緒姫。私も若くいたので、噂話は楽しゅうございますよ」

「そしてご苦労様、白の若君。君まで連れてこられて難儀だったね」

「ご機嫌よろしゅう、藤緒お姉様。いいえ、僕が頼んだのです。せつかくのチャンスは逃したくありませんから」

うわー上流階級の挨拶だ、すごい。

しかもこの美少年、女の子なのねっ。全然、見えないけど…！

「よろしく、桐生雅さん。私は香月藤緒」

「俺が斎孝弘だ、よろしくな」

いきなり私の後ろからぬって現れた男の子にビックリしてしまう。け、気配感じなかったぞっっ！！

そして斎くんには、さらに4人が深く頭を下げる。

香月さんが美少年とするなら、斎さんはなんだろう…野生の獅子みたいな感じ。

顔のパーツとかうんぬんより、存在感で判別させるような……そんな圧倒的な何かを持つてる気がする。

よく見ると、野生的なハンサムなだけ……本当に存在感が半端ないから、容姿はあまり関係ないと思わせる何かがあるのよ、うん。

「よろしくな、桐生雅さん。……ついても、俺堅苦しいの無理だから、名前で呼ばせてもらう。俺も名前で呼んでくれ」

「孝弘、くん？さん？」

「私たち、同い年だよ。だから私も藤緒でよろしく。呼び捨てがいいな、注連縄の運命共同体だし」

「えーと、つまり藤緒、で孝弘くん？わかった。私も雅でいいよ」

なんか、この二人……なんていうのか、秋津島公に感じた「強さ」をひしひし感じるなあ……強そう。

んでもって、きっと偉いんだろうな。

花族ではなく、華族かも。

しかし、私が花冠に関わるわけないし……んー縁遠い人だと思うんだけどなあ。

「さあ、楽しい一週間にしようね、雅。いやあ、楽しみだなあ」

ぐっふっふ、と笑う藤緒に、私が冷ややかな目を向ける。

「……親父くさいわよ、藤緒。見た目美少年なのに台無し」

私の突っ込みに、おじさまと孝弘くんが爆笑して、藤緒がいじけた。

もちろん、私はフォローしなかった。

まずは場所を選んで、テントを張る。

迷わないように木に数字がマーキングされてるけど、そんなのは何かあったら役に立たないので、目印に頼らない位置情報も得て、次に男手もあるので窯作り。

レンガが置いてあるあたりで、私の中では訓練からキャンプに格下げだ。ありえないから、普通は絶対！！

この手に慣れてる私はともかく、華族の義務をしっかり果たしているらしい藤緒と孝弘くんもてきぱき、薪を拾ってきたり、火をおこしてくれたりで能率がいい。

きちんとマニュアルもらってるんだけど、本当に初心者向きなので…私は自己流で通させていただきます。

藤緒も孝弘くんももらったまま見ていないのが丸判りな辺り、何度も義務を果たしに来ているんだろうと思う。

「あ、孝弘くん。そのキノコはダメ。食べたら幻覚起こすよ」

「そうなのか？見た目は綺麗な赤色なのにな…」

「……基本、綺麗な色のキノコは毒キノコだから…山菜は私が摘んでくるよ。ご飯お願いね」

すごいぞ、孝弘くん。君の採ってきたキノコ、100%毒キノコだ！！数十個とってきて、すべてが毒草って…ある意味すごくない？私は初日から死にたくはない…当たり前だけど。

ホント、師匠の言うとおり、この知識が役に立つ日が来るとは…何でも学んでおくべきだよ。

「藤緒、勿体無いから固形燃料ばんぼん入れないほうがいいよ。いつでももらえると限らないしね。余ったら次回に使えるんだから、節約しないと」

「おおつ、節約！素敵な響きだよね。わかった、ケチるよ！」

なんか違う。ものすごく違う。

浮世離れしてる、あの4人以上に……っていうか、あの人たちも大丈夫なんだろうか。周りが苦労しそうな気がするんだけど……。

うん、不思議とあの人たちが苦労するなんて、これっぽっちも思っ
てません。苦労するなら絶対に周囲に決まってる。

ひよいひよい、とちよつと高い木に登って木の実を取ったり、キノコや山菜を摘むと、焼き魚の香ばしい匂いがする。

戻ると、焚き火には焼き魚が作られていた。美味しそう。

「見て見て！魚釣ったよ！」

「すごいっ、藤緒が釣ったの？」

「ううん、孝弘。すごいでしょ」

「うん、すごい、すごい！」

魚釣るの大変なんだよねー。

配給されたチーズをパンに乗せて火で炙ると、それだけで贅沢な一品になる。

魚には塩だけ。しかしこれがまた美味しいの……！！

「しかし軍事訓練といっても、軍人さん来ないね。何教えてくれるか楽しみにしてたのに」

私としては、ナイフの効果的な使い方とか、サバイバル知識の上

級編とか教えてもらえると嬉しいのになーというと、二人が笑顔のまま固まる。

「え、そんなこと考えてたの？」

「だって軍人って職業でしょ？サバイバルに長けてるでしょ？私、刃物の扱いがちょっと弱いよね。包丁もあまり上手く使えないし。野うさぎの上手な取り方とか、蛇の美味しい食べ方とかは知りたいわ」

孝弘くんがぼろっ、と口から魚を落とすけど、本当のサバイバルしてると、絶対に思っただってば！！

「……雅、お前すげーよ。なんでそんなこと知ってたんだ？」

「それは私が紅花流の師範代だから。師範以上になると、山でサバイバル訓練をやらされるのよ。運悪く熊とバトルなら、何が何でも勝て！が合言葉だもん」

二人の顔色がさつと青くなるけど、別に脅してるわけじゃなくてホントなんだってば。

「…雅、熊と当たったことは…？」

「あー、二度だけ。でもあつちはおなかいっぱいだったから見逃してもらえたの。無益に戦いたいわけないわよ。うち、弟妹4人いるんだから怪我なんてしたら医療費かかって大変なもの」

医療費、バカにならないんだから。特に私が怪我したら、申請とかいろいろ大変になるし！

「……紅花流つてすげーな…普通の武道だと思ってたぜ…」
「よく護衛に紅花流の人見るけど、熊と戦う女傑だとは知らなかったわ……」

遠い目をした二人に、しまった！評判に関わるっ、と急いでメリツトを話すことにする。

紅花流が野蛮な人間だと思われては困るっ。

私はこれだけど、他の方は立派な淑女なんだからっ…熊とは戦うけど…。

「え、でもいいこともあるよ！野草とか薬草とか植物にすごく詳しくなるのよ。それに師範代になるとね、宮廷作法とかも教えてもらえるの！就職のときにちよつとは役立つかも知れないよね。普通の社員になるのは確実だけど、でもそういう知識あればどっかの取引先で有利になるかも知れないし」

「……宮廷作法って大変じゃね？俺、未だによくわからん」

「大変だよー。作法一つといえど、手ばかりできないし。宮廷の作法って独特だから」

ええ、大変ですとも！

秋津島公に対する拜謁法まで教わったよ、そんな目の前で見る日なんて絶対に来ないってわかってるくせに。

「本当は花臣になりたいんだよね。お給料いいでしょ。でも取りえってこれだけだしさ」

国に雇われるんじゃないやなくて、花族本人から雇われる人間を花臣と

いう。華族に雇われる人は華臣。

どっちにしても、花冠個人が雇うってことはそれなりの人物ということで、当然棒給が半端なくいいらしい。

高位花冠である華族に雇われるなら、もったいいだろうけど、そこまで夢想は出来ないし、そんな実力もないので、ギリギリ見れる夢で花臣になりたい、が野望だ。

それでも一般人からしたら、ものすごいことなんだし。

「私が雇ってあげようか？」

「ありがとう。でもね、藤緒。能力もわかんない人間を口約束でも、期待持たせちゃダメだよ。お金を払うに見合う人間雇わないと、絶対に損するんだからね。そんなのに給料払って、後悔するのはそっちよ」

「道理だが、シビアだな、雅」

孝弘くんが苦笑して火に枯枝を放り込むと、パチリと火が爆ぜる。

「私の考えだから押し付けはしないけど、お金をもらってことは、それだけに見合う働きをしなきゃいけないのよ。私は対価に見合う人間であるか、そこは重要な問題だと思う。それは桐生雅という私本人の価値だと思うの」

私の偉そうな言葉に藤緒が目丸くすると、嬉しそうに破顔する。うわー、すごいぞ。美少年の笑顔の威力って抜群だ。ちょっとときめいた。

「…本当に欲しくなったな、私のところに」

「藤緒がお金惜しくないとしたら、私を雇ってちょうだい」

でもよ、と孝弘くんが口を挟む。

「俺、よく知らないけど、お前くらいの年で師範代って普通なのかな？」

「…うーうん。私が最年少って言われた。そりゃがんばったもの。知ってる！？師範以上になると、国から補助金が上乘せされるのよ！」

ぐぐぐっ、とこぶしを握り締める。

「なるほど」

すごく納得したとばかりに二人が頷く。

「食べ盛りが二人、そしてもうすぐ食べ盛り予備軍が二人いるのよ。おなかいっぱい食べさせてあげたいもの。そのためなら、がんばるわよ」

「兄弟多いと大変だな。俺も藤緒も一人っ子だからな」

「うん。ちよつと姉妹とか兄弟に憧れるんだよね…今度雅の家にお邪魔しようかなー」

「いいな、それ」

「いや、いいけど。うちのご馳走、二人の家みたいに美味三昧じゃないと思うから、期待しないでよね」

嬉しいから、いつでも遊びに来てほしいけど、と私が言うと、二人がやったとハイタッチする。

「俺、ロールキャベツが食べたい！肉たっぷりなの！！！」

「あ、いいなあ、ロールキャベツ。私、クリームシチュー！！とろとろで野菜ごろごろの！」

リクエストがすごい庶民くさい。それとも気を使ってくれてるのか。

気を使ってくれてるなら申し訳ないから、うんと大きいの作ろう。

「わかった、うんとたくさん作るから、いっぱい食べてよね？口に合うといいけど」

「へーき、へーき」

「やった！」

なんか、二人ってうちの兄弟みたい…。

賽は投げられた 09

本日は私が魚釣りですが、岸でしゃがみこんで頼杖をついた藤緒が一言。

「……雅、熊みたいだよ、今の君」

ええ、私は水の中に腕を突っ込んで、魚を手で掬ったと同時にぺいっと岸にいる藤緒の方に放り投げる「熊さんの魚の取り方」を実践しています。

「だって、これが一番てつとり早いんだもの。釣りなんてしたことないし、ミミズとかもないでしょ。この辺りでは」

魚の餌は流石に配給品にはなかった…当たり前か。

そもそも、軍事訓練の割には食料も置かれていて、甘やかされていと思うの。

本当のサバイバルは自給自足なんだから。

でも…初心者には無理かなあ、蛇取ったり、魚釣ったりは。

「魚捕ることになるんだつたら、銚持ってたほうがいいんだけど、魚の血で川が汚れると、下流にいる人に迷惑だしね」

その危険性がないなら、木の枝削って銚作るのになー。

「雅一人いれば、有事にはお得だね」

「よくはわかんないけど、花冠伴って都落ちすることを想定したプログラムなんだつて。お姫様とか若様に生活能力求めるのつて時間

の無駄の極みだから、自分たちで人も養えるくらいの技術身につけなさいって」

「……ひ、ひどい……」

よしっ、五匹目ゲット！

「えー、でもだよ。私、あまり知らないけど、花冠ってうふふ、おほほで社交とか領地の統治してるから、そんな人たちにサバイバル訓練までしろってのは酷じゃない？適性とかもあると思うし」

「……うふふ、おほほ……雅、すごいよ。確かにそうだけど、君のセンス」

六匹目みつけ！

「あ、ごめん。気に障った？」

「まさか。庶民が花冠をどう見てるのかよく判った。面白いから全然オツケー」

よし、これで三人で二つずつ、と振り向くと、藤緒が拾った魚を括っている。

私も水しぶきを立てて川から上がると、近くで見えていたらしい軍人さんがぺこっ、と頭を下げた。

つられて下げると、彼（彼女？）が去っていく。

「えーと？あれは？」

「軍人の巡回だよ。参加者に何かあったときのために、常にこのあたりには数人の軍人が巡回することになってるんだ」

わからないことは質問すると教えてくれるし、初めての人のためには火を起こすのかも手伝ってくれるよ、と藤緒が教えてくれる。

「……なるほど。至れり尽くせりだねえ。あ！」

「…蛇の上手な食べ方はさすがに知らないと思うよ、雅」

ええーっ、どうして?!

じと目になった藤緒に、私が不満そうな顔を向ける。

「未だかつて、そこまで窮地に陥った軍はないから！」

「ええー。そうなの？仕方ない、今度の紅花流の訓練の時は、もつとじっくり話聞こう。期待してたのにー。がっかり」

「君だけだから！そういうことではがっかりするの！」

普通は、火を起こして食料見つけるだけでも精一杯なのっ、と思いつき突っ込まれて、目から鱗。

「…ひよっとして、紅花流って、軍よりいっちゃってる？」

「うん、君の話聞かきりでは」

「さっ、次行こう！」

いかん、形勢不利だ。こうなったら三十六計逃げるにしかず！

しかし普通じゃなかったんだ、うちの道場。

ちよっただけ認識変わったよ。まったく後悔とかはしていないけど。

賽は投げられた 10 (前書き)

ちよっぴりだけ、グロテスクな表現があります。血が苦手な方はちよっと気をつけてください

「俺：ホント雅と同じ組でよかったよ。マジ、尊敬するわ」

「私も…。ホントに心から尊敬するよ。いいお嫁さんになれるよ…」

そんなことを言われている私の指は、見つけてきた雉の毛をむしりとり、おなか搔つ捌いては綺麗に洗っています。

手にした内蔵、どうしようかなあ…煮込みシチューにするか。

「んもう、怯えすぎだよ。これくらいできないと、生きていけないわよ」

藤緒と孝弘くんが抱き合っておびえているのは、多分私の両手が鳥のおなかに手を突っ込んだせいで血まみれになっているからだと思われる。

左手には引きずり出した内臓持つてるし、腕まで真っ赤だと、ちよつとホラーな光景かも。

血、したたってるし。

「いや、そんなことしなくても生きていけるし！」

「ごめん、触るのやだ、それ」

二人が涙目になっているのが、不思議だ。

でもね、食うに困ったら、ホントなんでもできるようになるんだってば。

「慣れたらどうってことないって。大体、料理人とかいっつもこんなことしてるんだし、気にしない、しない」

そんな些細なこと気にしてたら、人生やつてられないわよ。

「あんまり細かく調理してる暇ないから、丸焼きにするわよ。ご飯とか香草とかおなかに詰めておけば、贅沢な一品になるからね」

「任せる」

「よろしく」

本当は下ごしらえに時間かけたいところだけど、仕方ない。勿論オーブはないから、灰蒸しにする。

藤緒と孝弘くと過ごして5日目のキャンプ（どう考えても、やっぱり私の中では訓練じゃなくてキャンプレベルだわ）はなかなか順調だ。

近くに温泉が湧いていることも発見したし、山の幸も川の幸も豊富だし、季節も全然問題ない季節だし。

「あー懐かしいなあ、この雰囲気。梅見月に玄武領にある高麗山にサバイバル訓練した時は、寒くて飢えるかと思ったもんねー。これくらいなら天国よねー」

「……おい、藤緒…確か高麗山って秋津島で一番高い山じゃなかったけ？」

「しかも梅見月って一番寒い季節に、あの雪深きあそこで……勇者なんてものじゃないってっ」

「え、だって…師範代になるためには誰もがぐるぐる道だし。私、運が良かったのよ。冬眠してる熊の巣があって、毎日そこでぬくぬく眠れたし。二週間とはいえ、おなか空くと切ないのよね」

「……普通の人間は凍死するから……」

あはは、大げさだわ。

ここに死ななかつた人間がいるんだもん、大丈夫、大丈夫。だつてうちの師範代全員、そのテスト潜り抜けているんだよ。未成年だつてこと考慮されて二週間だつた私なんて甘いねっ！

「成人してたら一ヶ月こもらなきゃいけないから、二週間くらいなら平気よ。きちんと防寒装備してたら。あの季節だと、熊に襲われることもないしね」

「……なんて恐ろしいんだ、紅花流……おい、いいのか、藤緒。そんな師範代がごろごろいて。熊よか怖いじゃねーか」

「さすが、朱雀候の作られたものだよ。恐ろしい……容赦ないつて言つか、なんて言つか。悪魔よかひどいよ」

えー、ちつとも平気なのに。

なんかこの二人には不評らしい、うちの子たちは喜んで私の話聞いてくれたのに。

「二人とも、ちょっと驚きすぎじゃないかなー？こんな普通よ」

「違うからっっ！！まったく違うからっっ！！」

「俺たちが普通だからっ！！」

えー、そうかなあ……。

賽は投げられた 10 (後書き)

梅見月は2月です。秋津島では、一月にいくつか呼び名があったりするので日付はともかく、月に関しては風流な言い回しの暦で動いています。

賽は投げられた 11

「こういうのは普通だよな」

「まあな」

「ちつつつつがつつつ！！！！熊はどこにでもいるけど、こんな
の見たことないわよつつ！！」

6日目の午後、私たちは全力疾走しています。ええ、今までにな
いくらいに死に物狂いで！！多分、人生最大の全力疾走だと賭けて
もいいつつ。

その理由は、後ろから追いかけてくる動物にあつたり。

うわあああん、バカ！！来るなつつつつ！！！！なんで追いかけて
くるのよつつ！！

「…そもそもさ、俺とお前がここにいて、何もないつて思うのが間
違いだつたんだよな、多分」

「でもさ、私と君がいて、ここで何かが起こるなんて思うわけない
じゃない、普通」

「どうでもいいから逃げなさい！！！！」

全力疾走で逃げる私たちの後ろから追いかけてくるのは、見たこ
とのない火トカゲ…全長3m超。

しかも炎を口からチロチロ吐いているのが怖いっ、ここ森なのよ
！！引火したら火事になっちゃう！！

「水の方に行くわよ！！森が燃えたら、怪我人が出るし、森の生き
物も大迷惑よつつ！！」

一つの大火事で数十年は生態系が狂っちゃうのよ、とんでもない

話だわつ。こんなに豊かな森が壊れるなんて、絶対にイヤだ。

やはり全力疾走で川を目指しながら、後ろの二人は話を続けている。

「ここ、何が封印されてたっけ？」

「あー、多分、火龍の卵。孵化するかわかんなかったから埋めたって記録あるわ」

だから、どうしてそう暢気にしゃべることができるのよおお。

「お前ン家って、ホンツト、いい加減だよなー。埋めるなよ、せめて孵化するまで育てるよ」

「そんなの、うちの何代か前の人に言っつてよ。大方、『育てるの面倒臭そう』埋めちゃえ つか未来に誰かどうにかしてくれるでしよっ 『って考えたんじゃない？』」

「……すんげえ他力本願……。そこまで行くと天晴れか…？」

そこ、考え込むようなことなの！？

「そんなの、どうでもいいから、早く逃げなさあああ！踏み潰されちゃうわよ！！」

「じゃあない、なんとかしましょうか」

は？

「なんとかできるのか？言葉通じないだろ？」

「んー、古代言語だよね…きっと。面倒だけど、古代言語使えるように固定するわ。トリ、よろしく」

「じゃあねーな。俺、あれ嫌いなんだけど…こっ恥ずかしいし…っ

て言ってる場合じゃないよな」

なにかよくわからない会話の後、二人がじーっ、と私を見る。
何、なんなの!!

「ま、雅なら大丈夫だろうよ」

「雅だもんね、平気、平気」

「だから何が!! もう少し、私にわかる会話をしてちょうだい!!」

しまいにキレルわよ!!

もうキレかけているけど!

「雅、ちよいとお願いがあるんですけど」

「なに!？」

ちなみにまだ全員、全力疾走してる最中だから、私の声もいつもよりも荒れている。

「適当に、この子を霍乱してほしいの。足早くしておくから、よろしく」

「は?」

藤緒が何かぶつぶつ唱えて、私の靴めがけてなにやら指で文字を書くと、いきなり靴が金色に光り、体が異様なまでに軽くなる。と、飛んじやうよっつ、これ。

そんな私の足元に、光の粒子が集まって輝くのは…

(魔法陣!…これ、魔法だ!…すごいっ)

「もうヤケだっ、何でもやってやるわよ!…!」

何かなんだかわからなくても、やるべきことが決まっているので、仕方なくジャンプすると…3m以上飛び上がり、火龍の肩に乗ってしまっ。

(バ、バランスが…っ…)

いきなり3mも飛べるようになっても、バランスを取るのはい。急いで、呼吸を整え、即座に対応できるように…おなかのすぐ下にある丹田に力をこめて踏ん張る。

うっ、こんな巨大なのに蹴り食らわしても、多分蚊に刺された程度なんだろうなあ……こういうの、一体どう対処するのよっ。

わっ、視線が合った。まずい！

今度は頭に飛び乗り、尻尾に飛び乗り、と跳ねて跳ねて、うさぎさんよろしく跳ね回る私の頭の中は、嵐のようにぐちゃぐちゃだ。

もはや、この火トカゲがなんなのか、追求する余裕すらない。

「楽しそうだな、意外に」

「雅の適応力ってホントすごいよね」

「感心してないで、早くなんとかしてよねっっ！！！！」

そこっ、のほほんとしてない！！

どこが楽しんでいるのか、この緊迫した空気から読み取れるものなら読み取ってよ！！

しまいに泣かすわよっ、その前に泣くかもしれないけど。

賽は投げられた 12

「はいはい」

何をするのか、ジャンプを繰り返しながら目の端で捕らえると、いきなり藤緒が歌いだした。

『……………』

(歌?)

それにあわせて藤緒の周りを、淡い藤色に満ちた光が、私の時とは違う大きくて複雑な魔法陣となつて足元に満ちる。

聞いたことのない歌はどこか懐かしい旋律で、でも言葉の意味はまったくわからない、というか聞いた事がない音で。

ただ、何かが頭の隅に引っかかったのは、藤緒が秋津島公と同じ雰囲気を出していたからだ。

魔法陣が藤色つていうのも、連想させる一因かも知れない。

(これは多分、子守唄だ…聞いたことのない言葉だけど…)

遠く、近く、寄せるさざなみのような音の調べ。

歌っているのは、まちががなく「魔力」の歌。

こんな時でないなら、きっと聞き惚れていただろう。

ただわかる。

胸に手を当てて歌っている藤緒の歌に聞き惚れているのは、私だけじゃない。

「風が止んだ…」

あり得ないと思うだろうけど、風が止んで、先ほどまで鬱陶しいくらいに大きかった滝の音も止まった。

チラリと横目で見ても、水が途中で止まっているのがわかって表情が引きつる。

時間が止まっているのではない…自然が藤緒の歌に聞き惚れているのだ。

<竜の子守唄だ！太古の調べだよ>

「え？」

誰の声？

<急いで、急いで！秋津島公が歌ってるよ！早く聞かなきゃね>

<尊き御身に幸いあれ！秋津島公が歌うのは何百年ぶりだろう…ああ、心が洗われる音色だ>

<私は初めてだから、嬉しいわ。祝福の音色をもっと聞かせてちょうだい>

何かが、いる。

目に見えない何かが、そこら中から藤緒の歌を聞くために、ここに集っている。

今までにない濃密な森の気配に、むせ返りそうになる。

（秋津島公？）

誰が？まさか……あれが？

嘘でしょ？

火トカゲが目をとろーん、とさせて、動きを止めたので、ハッと我に返った私は頭上で様子を伺う。

そして、やれやれと頭を掻いた孝弘くんが竜の前に立った。

「雅、降りて右に飛べ」

その言葉通りに急いで竜から降りて横の林に身体を隠すと、孝弘くんがどんっ、と右足を踏み鳴らした。

瞬間、ずん、とおもいつきり身体に重力がかかる。

彼がただ軽く足を踏み鳴らしたただけなのに！

(何、これ…？お、重いつ)

必死になって火トカゲを見ると、火トカゲも少しめりこんでいる。

そしてため息を吐いた孝弘くんがもう一度、どんっ、と足を踏み鳴らすと、また重力がかかり、火トカゲもめりこむ……それはいいんだけど、私も重いんだってば！！

賽は投げられた 13

『竜王の末裔たる幼き火竜の娘よ。我は誰ぞ?』

孝弘くんの声に、藤緒の歌にさざめいていた『声』たちがぴたりと止まり、火トカゲもうるたえたように孝弘くんを見て、「!」と何か理解した顔をした。

ちよつと可愛いわ、その顔…と重力の付加に耐えている私は、明らかに現実逃避していますとも。

さつきからわからないことだらけで、私の容量はパンパンだから。

『太古の気配を持つ精霊たちよ。我は誰ぞ?』

<御身、かけがえのない女神の愛し子よ>

<御身は唯一無二の我らが主>

<御身は世界にありて、世界の律を身に宿す尊き御方>

<情け深い御身よ。真珠と花のこの国統べし、麗しの御君。我らは御名を呼ばわること許されぬ卑賤の身なれば。御名を呼べぬ哀しみ、どうぞ哀れみたまえ>

目には見えないけれど、確かに聞こえる声が、嬉しそうに…けれど、どこか悲しそうに敬意を持って答えている。

私にすら、その気配がわかるのだ。

『太古の歌奏でし我が楽師にして、我が代わりに秋津島を統べし宿命持ちし者よ。我は誰ぞ?』

孝弘くんが振り返り、歌をやめて足元に膝をついている藤緒に声

をかけると、藤緒が笑顔で頷き、顔をあげる。

「御身こそは、我らが頭上にいただく至高の主。我ら花を統べし、女神の一人子。我が君、<皇>でございますれば、臣下たる我は最高の敬意を持ちて、御名を奏上申し上げるものなり」

<皇>つて…女神の子供である神様…？

『我こそは母たる女神に花捧げるためにこの地を願ひし、この国の主たる<皇>なり。すべてのものよ、疾く我が前に侍れ』

けっして強い声ではなかった。

そもそも、彼の声は確かに耳には聞こえていたけれど、秋津島公と同じ『魔法』の声で、きつと言葉は違う。藤緒の歌と同じように。

なのに気がつくのと、ぺったりと座り込んでしまった。

目に見えぬものすら、おそらくは足元にひれ伏しているだろう…

…孝弘くんの声に逆らえない。

頭はともかく、身体は立つことを明らかに放棄していた。

チラリと横目で見ると、べったり地面に伏した火トカゲがぼろぼろ涙を流しながら、きゆうきゆう、火を吐いて鳴いている。

なんとなく詫びているんだな、とわかったのはいいのか、悪いのか。

どうでもいいから火を吐くのやめてほしい…怖いから！

けれど、火トカゲが泣くと、涙が綺麗な石に変わるとは知らなかった……何かに使えそうで便利ね…とぼんやり見ている。

ええ、もう完全に思考放棄していますとも！

孝弘くんがふう、と息を吐くと、炎がゆらめくような綺麗な涙を
拾って、火トカゲと話し出す。

その距離、燃えちやうよ…危ないって。

「何、楽しそうだったから目が覚めた？遊んで欲しい？…お前、自分がいくつだと思ってんだ。ふんふん…お前、面白いのか悪いのかわかんねーな。つーか、見境なく、人を襲うな。お前には遊びでも、相手には命がけだ、バカ。いいか、人間は簡単に死ぬんだよ」

人間、意外な特技があるんだね…孝弘くん、人外と会話できるなんて。

特技を披露している孝弘くんに目を丸くすると、困ったように孝弘くんが私を見る。

「雅、ちよいと頼まれてくんねえ？」

「何を？」

普段どおりの声だから、うつかり普段どおりに返すと、孝弘くんが困ったように笑う。

「こいつ、お前が超絶好みなんだって」

「は？」

「だからさ、悪いけどこいつの面倒見てくんねー？」

この3mちよいの火トカゲを？どうやって？

「我が家の家計では賄いきれませんっつっ！！無理！！うちはペット禁止だし、こんな火トカゲどうしろと！」

きっぱり言い切ってやると、言葉がわかったのか火トカゲがガーン、とシヨックを受けた顔をする。

でも仕方ないじゃない、アンタみたいなデカいの、どうしろって
いうのよ！

しかも、ものすごく物騒よ！

「火トカゲじゃなくて、竜だよ、雅」

おかしそうに藤緒が笑うと、立てなかった私の手を引っ張って起
こしてくれる。

暖かい手の感触にほっとしたのは、きっと私が普通の凡人だから
だ。

6日も共にした隣人が違うなんて…まだ理解できない。

「…竜？それって女神が<皇>をこの世界に下ろす時に連れて来た
聖獣のこと？」

伝説では、女神が一人子である<皇>を下ろす時に、青龍・朱雀・
玄武・白虎の四聖獣を護衛につけたといわれている。

だから東西南北の諸侯は、<皇>の守護獣にちなんだ名前を与え
られていると。

「……これが？どこが？」

アンタ、走ってたわよね？飛んでないじゃないの。

私の声があったか、背中の翼を広げて飛ばうとする竜に、迷惑
だから飛ばなくていいよ、と手を振る。

この大きさを飛ばれたら、風圧で私たちが飛ばされてしまうわ。

「竜ってデカさ変えられるでしょ？別に何か食べるわけでもないし、
手乗りサイズになってれば？火吐いたらダメだよ」

「雌の竜が女に懐くなんて、ホントにあり得ないくらいに珍しいからな、持っとけ。守護してくれるさ。雅には必要だろうしな」

ほんっ、と音を立てて、まさしく手のひらサイズになった竜を差し出す孝弘くん、思わず受け取ると、大きな縦線の入ったうるうる瞳が私を見上げる。

うっ…こ、これはまずい。

「きゅっ…きゅ…きゅるるっ」

な、何よ、可愛らしさを前面に押し出した哀願じみた声は。

まるで私が悪者じゃないの、これで断ったりしたら。

ダメ押しとばかりに祈るように組まれた指で「お願い」とばかりに首をかしげられて、私はがっくりとうなだれた。

「……………くっ……………負けた……………」

周りの生ぬるい拍手の音に、どこか遠くで危険の鐘が鳴り響く。うん、既に遅いから、絶対。

そしてなんかすごく嫌な予感がして振り向くと、二人がにやーっとなんか笑っている。

「良かったな、秋津島公。お前の封印一つ、可憐な花が受け持ってくれたぞ」

「真に重畳にございますな、我が<皇>」

びっっ、と私の精神にヒビが入る。

二人の「ほっほっほ」「ふっふっふ」と不気味かつわざとらしい笑いが、更にピンチを押し上げる。

そう、まるで初めて熊に遭遇したときのような…。

いやっ、忘れていたいの！

私は平凡でも充実した、普通の人生を送りたいのっ。アンタたちと関わりたくないのよ。だから、それ以上は言うなーっっ！！

「改めて紹介するよ、雅。私は秋津島藤緒。この国で唯一の公爵だよ」

「か、香月って…」

「普段からそんな名乗っていたら一発でわかつちやうじやない。

あ、本姓は香月なんだよー。秋津島ってのは爵位に付属する名前。で、こっちが」

「当代のく皇くだ。別名が斎之宮だから、斎とつけてるけど、便宜上。名前は本物だけだな」

ぶるぶる、と竜を持ってる手が震える。

「…っ、っそ………」

嘘だと思いたいけどっ、思えない節が色々ある。

軍人が頻繁に巡回していたのは何故？

どうして回りにキャンプの煙が一個も立ってなかったの？

精霊とやらの声が聞いたのはどうして？

封印なんて物騒なものを施せるほどの力量を持つ花冠が、秋津島家以外にたくさんあるものだろうか？

そして孝弘くんがどうして竜と会話できるの？

何よりも魔法陣って…その人の色を表すものじゃなかったか？

よし、決まった。

「おいっ、雅!！」

「雅?ぎゃーっっっ、誰かーっっ!！」

私は気絶させていただきませす。

もー知らんっ、勝手にしてちょうだいっっ!!

孝弘さんと藤緒の慌てた悲鳴をバツクミュージックに、私は気を失った。

(番外編) ささやかすぎる陰謀のマナーについて 01

「本当に、可愛らしかったわ。あの普通っぷりが」

ほう、と悩ましげに息を吐く花音に、詩織も微笑んで口元に檜扇を当てる。

「今まであなたの花を見て参りましたけれど、とても可愛らしい花でございましたことね」

「でも、驚きましたよ。あの二人と「普通に」会話できるなんてね。たとえ知らなくても、か弱きものは違和感を感じるものなんですけど…」

宗徳が苦笑しながらお茶をすすると、雪博が資料を見る。

それは雅の身上書一式…もちろん、皇都の役所から取り寄せたものである。

「13歳で紅花流の最高峰である師範代になったのもすごいことですが、特出すべきは膨大な神力を持っていることを紅花流が隠していたことですよね」

うーん、それってどうなの、と言いたげに眉を寄せる様も可愛い雪博に、花音が羽根扇を口元に当てる。

神力を持つ者は即スカウト。最高の雇用条件に目をくらませて、ウエルカム神殿！という流れが常套手段。

入れてしまえばこつちのもの、絶対に逃さん！という意気込みが伝わって来るのは、神官はこの国ではある意味、特殊な立場だからだ。

「常盤の見立てだから、許してちょうだいな、雪。神官も欲しい、当たり前だけど。でもね、花はもつと必要でしょう？我らは数を減らしてはならないのだから。雅さんにはどうあっても、こちらに来ていただくわ」

その言葉に、三人が「やはり」と言いたげな顔をする。

「貴方が認められるのですね？花音嬢」

「ええ、私が認めます。あれは、私のところの花よ。そして、私の花ではない。あれは唯一にして無二の“秋津島公のためだけに咲き誇る花”にまちがいなくてよ」

花の気配を感じて近寄つたら、そこにいたのは普通の…けれど気配が段違いなまでに清冽な少女だった。

どこまでも前を見据えて潔い生き方をして来たのだろう、そしてそのためには色々なものをそぎ落として生きてきたはずだ。

そして四人にはすぐに花の香りがわかった。

実際の香りではない…甘くて清冽な香りは、花を選別する人間たちからこそわかるもので、雅は一際その香りが濃厚だった。

気配も濃厚、香りも濃厚…それが意味するものは一つしかない。

ただし気になったのは、彼女からは別の気配もするということ。だから四人は急いで、雅の経歴を洗った。

そしてわかったことは、紅花流総帥と皇都枢機卿が彼女の後見人についていて、なにやら雅の身柄について暗黙の了解があったらしいこと。

事実、雅を花臣や華臣にしたいという申し出はすべて常盤が突っ

ばね、神力を発見した神官たちには富山が説き伏せてはもみ消していた。

「聞いてみたんですけどね……富山枢機卿の血管が切れそうで……。よほど雅嬢を逃したことが悔しかったのでしよう。仕方ないとは言え。あれだけの神力があれば、まちがいなく自分の跡取りにできますしね」

おいおい泣いて、どれだけ雅が優秀な生徒なのかを切々と訴え、最後には「あのアマさえいなければああ」と神職にあるまじき言葉が飛び出す始末。

聞き役に回った宗徳は、血管が切れたらどうしよう、神官を呼ばねばならないか、とひやひやしたものだ。

「……常盤と富山は幼馴染で、かつ色々なことで競い合ってきたライバルですから……」ということにしておいた方が、私たちの心は平穏でございましょうな」

詩織の言葉に、皆も「そうしよう」と自分達の心の平穏のために、そつとこの記憶は封印することにする。

外では秋津島公の代理人として、さまざまな神事を取り仕切り、公の信頼厚い知性溢れる凛々しくも頼れるカリスマ老枢機卿と、数十年前は皇都の男性の憧れとしてあまたの貴賤を振り続け名を残した絶世の美女にして、紅花流の総帥として君臨する淑やかで優雅な女性の本質など、知っても夢がぶち壊れるだけで、誰にも何の益もない。

むしろ害悪だ。

「常盤は慎重だから、多分雅さんには何も知らされていないと思うの。実際、自分のことを平凡な娘だと思っているようだったわ」

「…平凡な方は、むしろ…公と<皇>の近くには侍れないと思うんですけど…僕は公に慣れるまでに半月かかりました」

最年少花冠として選ばれた雪博は、あの日の風景を思い出して遠い目をする。

あきらかに雅は、まったく何も感じていなかったのだ、秋津島公に<皇>までいるあの空間で。

他の参加者たちが、二人の気配に何かを感じてずざざざ、と引いたにも関わらず。

「でも、花音お姉様の話でようやく僕も理解しました。雅お姉様の本質って多分、公と<皇>に似ておいでなんですね。だから違和感をあまり感じない」

雪博の分析に、三人が同じような動作で口元に扇を当てる。

「私達は<皇>の花にして、秋津島公の僕であり、なおかつ領地のあまたの花たちを束ねることが義務だけど、雅さんは秋津島公だけの花だものね」

「同性でよろしゅうございましたこと。異性でしたら、まちがいなく秋津島公のえじ…こほん、婿がねでございますわ」

餌食…確かにな、と皆は遠い目をする。

藤緒が「あーれー」と襲われるところなど想像つかない。むしろ

「よいではないか、よいではないか、ぐっふっふ」と襲う側だ。
多分、男でも襲われる…間違いなく。

それくらい、秋津島公と雅は相性がいいのだ、雅にとっては何の慰めにもならない話だが。

「あら、でも先代秋津島公は殿方で…その時の花は常盤でしたわよね？」

皆が宗徳を見ると、彼が閉じたままの檜扇を口元に当てて、記憶を手繰る。

「…先代様はあまりにも身体がお弱くて、しかも<皇>がいらっしやらなかったものだから、いつも奥の院で祈られておいでなので、常盤は姫を守る騎士のようにずっと傍にいましたよ。見た目も…こういうのはなんです、儂げでなよやかで美しい桜のような方でした」

たとえば花冠といえど、秋津島公に会うことは滅多になく、宗徳の場合は別事情があつて何度か目にする事があつたのだが、たしかにあれこそを佳人というのだとつくづく思ったものだ。

青に近い紫色をまとう彼と自分が同性だと信じられたことは一度もない。

どこもかしこも華奢で、着物の重みにすら耐えられないのではないのかとハラハラしたのも遠くはない思い出だ。

「……おじさま、あの…先代様の性格は…？」

雪博の言葉に宗徳がにっこり笑う。

「……藤緒様をお育てあそばされた方ですから……」

それだけで、わかってしまう自分達が悲しい。

「では、これから雅さんは大層苦勞されそうですね……」

「あの素晴らしいツツコミができるなら、対等に渡り合えるのではなくて？公をあそこまで凹ませただけでも、雅さんは私の中で株がぐんつと高くてよ」

確かに、あんなに彼女を打ちのめしたのは雅だけだ。

「彼女がこちらに来る時が楽しみですね。私は他人が驚くのを見るのも好きなんですよ」

「……おじさま、それは少しばかり趣味がお悪いですよ。雅お姉様にとっては大変なことなのですから」

雪博がやれやれと肩を竦めると、詩織がぱちんと扇を閉じる。

「ともあれ、皆様方。絶対に何が起ころうと、ええ……たとえ天変地異が起ころうと、雅さんを逃してはなりません。隙あれば、そこを狙い、なければ隙を無理やり作り、コンクリートのごとく四方をガチガチに固めて、逃れられないようにするのですわ」

「コンクリートは甘いわ、ダイヤモンドのごとく固めねば。蟻の子一匹通る隙間も与えなくてよ」

うふふふ、おほほほ、と笑う横で、雪博がこっそりため息を吐く。

「……僕は秋津島公の御為に、もちろん雅お姉様の確保作戦には賛成ですけれど……これ、絶対に雅お姉様にバレてはいけない話題ですよ
ね」

「…雪博。世の中にはね、知らない方が幸せということがあるのだよ。我々にできることは、精々こちら側に来た雅嬢の待遇を良くすることくらいだろうね」

どこか生ぬるい笑みを浮かべる宗徳に、雪博も決意をこめて頷く。

毒を食らわば皿まで。秘密は墓の下まで持っていてこそその秘密。わかっていても、こういうのを「陰謀」というんじゃないかしら、と思う雪博だった。

賽は投げられた 15

秋津島国の首都・皇都。

国事を中心である星麗宮は、皇都に浮かび上がる天空城であり…
当たり前だけど、一般人の入れるところではない。

私がここにいるのは特例中の特例だ。

シャツの襟と袖、スカートとジャケットの襟が赤のタータンチェック。襟には黒タイ、その上に黒ジャケットに金ボタンという、近隣でも有名で可愛いうちの学校の制服で来たのは、他に礼服なんぞ持っていないからだ。

スーツもドレスも一個も持ってないし、そもそも私は星麗宮に来るような用事は一切なかった…当たり前だけど。

謁見の間という場所に通されると、金糸の装飾が美しい真っ赤なカーペットの両側に並んだ男女がいる。

パツと見た感じ、略礼装っぽいから、緊急招集されたんじゃないかな。

普通、正装ってドレスとか着物とか作るのに時間かかるって聞いたことあるし。

年齢はひどくばらばらで、はるか遠くに見える玉座までの距離が多分、身分の距離。

入り口（花冠…多分、花族とか） 玉座（身分の高い華族）

そして私は見てしまったんだよ、見たくなかったけど。

「……………」

一週間ちよつと前に、ドームでお話していた親切な四人組がにっこり笑って、玉座の一番近く、三十三段ある『至高の階段』にいるのをねっつっ!!

そこに登ることができるのは、臣下として最高の地位である<四神>…東西南北諸侯を束ねる、たった四家の大諸侯のみ!

おーのーれーっっ、もう花冠なんて信じないぞっつ!!
私が何をしたって言うのよ!!

私はとりあえず宮廷作法に則って、玉座まで約1/3の距離というところまでカーペットを歩くと、秋津島公の花紋である藤が金糸で刺繍されている場所に膝をつき、左手で拳を作ると右手でくるむように重ねる。

拱手と呼ばれる、紅花流師範代の人間と軍人に許される礼儀作法だ。

他の作法もあるけれど、スカート短いから下着丸見えになっちゃうので勘弁願おう。

「秋津島公が僕、桐生雅…お召しによりまかりこしました」

「許す、近こつ」

「はい」

扇子を持った白い御手が手招くのを確認して立ち上がり、玉座の下までたどり着くと、今度はきちんと五点礼をして、秋津島公の言葉を待つ。

本当は秋津島公の足元に額を当てるのが一番正しい礼儀作法なんだけど、三十三段上にいる人間にそれできるほど、私は首長くない

から！

しかも、なんていうかね…ヴェール被っていても、にまっと笑っているのがわかつちやうんだよね。見てると絶対腹立ちそうだから、顔は上げたくないわ…こんちくしょうめ！

そして玉座の後ろに、更に数十段の階段と御簾の降りた高御座がある…うん、気配がひしひしするよ、孝弘くん。

アンタ、絶対笑ってるでしょ！！

「よう、来た。妾の麗しの花よ。そなたに会えて嬉しいぞ」

そうだろうねっ、アンタは別の意味で嬉しいに決まってる！！

「公のお召しとあれば、それを喜ばない民がどこにおりましようか。この至らぬ身をお呼びいただけの栄誉、わが身の誉れにございます。末代までこの誉れ、語り継ぎたく思います」

ふっ、大人って汚いよね！ごめんよっ、わが兄弟。

お姉ちゃんは一足先に大人になっちゃいましたよっ！！嬉しいわけないわよっつ、と暴れたいのにできないのが、歯がゆ〜い。

うっ、出来るものなら、本当に出来るものなら、この三十三段の階段駆け上って、至高の玉座の主の首、ガクガクしてやりたいっ！！

賽は投げられた 16

「ところで…一つ聞いてもよろしくて？」

「ぱちんと扇を鳴らした詩織さん（…大振袖の蒼色からして絶対に青龍候！）が不思議そうに私、正確には私の肩を見る。」

「その肩に乗せている子はなんである？私は見たことがない」

「きゅきゅ、とごきげんにくるくる私の肩で踊っている輪廻に、皆の視線が集まる。」

「確かにこんな生物、どんな珍獣コレクターだって見たことはないだろう。」

「現在にいる生物じゃないし！！」

「太古の息吹を持ちます『竜』にございます、青龍候閣下。属性は色にてお分かりいただけでしょうが、火でございます。故あって、この子を守護獣とすることになりました」

「花族の敬称は「卿／男（女）爵・子爵」と基本が名＋卿か、爵位だけで、華族の敬称は「爵位＋閣下」、秋津島公は「殿下」である。たとえば、私が女爵だとすれば、女爵、または雅卿と呼ばれ、もしも白蓮伯爵なら、白蓮伯爵閣下と呼ばれるわけだ。」

「公爵位は太古の御世から秋津島家しかないから、秋津島公爵殿下といえ、当代の秋津島公でしかありえない。玉座は一個しかないからね。」

「高位になればなるほど、名は呼ばれなくなるし、実際…私は藤緒に出会うまで、秋津島公に名前があるなんて想像もしなかった。」

<四神>の皆様にあることも知らなかったよ…ホント。いや、一
応人間だから、あつても不思議はないんだろうけど。

どうしてカツコをつけたかと言うと、秋津島公は半分神族だとい
われているからだ。

つまり基本的に神様扱いだから、恐れ多いと誰も教えもしなかつ
たんじゃないかなと思う。

実際、神殿でもそんな扱いだし。

そして秋津島のヒエラルキーのトップは<皇>なので、<皇>は
「陛下」が正しい。

まあ、<皇>を呼ぶときは基本が私みたいに<皇>というし、ち
よつと年を取った人たちは恐れ多いとかいう理由で「聖上」とか「
御君」とか「主上」とかいうみたい。

女神は別枠だからいいけど、公爵位までが皇族（つまり神族）、
侯爵位からは臣下扱いで、そのヒエラルキーは絶対だ。

皇族と華族の差は、一般人と花族の差よりも大きい。

どうしてかと言うと、希まれにあることなんだけど…すごい功績を立
てた一般人が花族になるということがあるからだ。花族が華族に比
べて多いのは、この辺りのことも関係してるんじゃないかと推測し
ている。

ついでに色について。

秋津島公に次ぐ身分を持つ大諸侯である四家の色も準禁色であり、
これをまとえる人間は…当然四人しかいない。

「紫」といつても、様々な色がある中で今代の秋津島公は「藤色」
を我が色とした。

けれど、白・黒・紅・蒼は、必ずこの色、と決められているので、
その色は見ればわかるし、初等教育でも叩き込まれる。

色を選べるのは秋津島公だけの特権だ。

だって御世が変わったら色が変わって、当然秋津島国中の色が変わる。

つまりは税金がおつそろしく使われるということだ。

気の毒に藤色をメインに使っていた店舗などは、すべてもっと濃い色か薄い色かに変更しなきゃいけないとか、服の色も使えなくなるとか。

10年前に代替わりした時に、きれいな藤色の制服を着ていたOしがいなくなつて、制服がもっと蒼に近い紫に変わった時は幼心にも「？」満載だったけど、あれは会社も痛かつただろうな…大きな会社だったし。

そんな風に諸々に影響が出るので、こんな恐ろしいことは秋津島公しかやってほしくないし、できるだけ代替わりもして欲しくないと願う。

そして花冠も全員自分の色を持っていて、大体は色で家がわかる仕組みになっている。

不思議なことにく皇の色は、翡翠色と太古の御世より決まっています、それが鳥の「カワセミ」なのか、鉾物の「ヒスイ」なのか、研究者の間でも意見が分かれているらしい。

どっちにしても花ではなく、今のところは鉾物の「ヒスイ」ということで神殿が公式発表しているけど、神殿の紋章は鳥の「カワセミ」で、神官は「ヒスイ」を身に纏っている辺り、ちゃっかりしてると思う。

そういえば、輪廻の瞳の色もヒスイ色だったなー、と思うと、また下問された。

「竜…それは我らが<皇>を乗せて降りてきた<四神>の…ですか？」

雪博くん…：きつと白虎候（白地の童水干姿だから…）が首をかしげる。

「そうじゃ。妾の何十代か前の秋津島公が封じて埋めた記録がある故な。太古の生き物はけっして人に懐かぬ。彼らのほうが賢い故にそれは、そなたの心の清らかさを好ましく思っただよ、我が花」

うーそーっけーっっ！！！！

ああ、怒鳴りつけたいっっ！！首ガタガタ言わせたいっっ！！
アンタと孝弘くん、あっさり私に押し付けたじゃないのっっ！！
確かに好みとは聞いたけどさ。

「そなた、火竜の娘になんと名前をつけた」

「はい、公爵殿下。「輪廻」と名づけました」

太古の生き物は長命だ…：多分私たちのほうが先にいなくなる。
だから輪廻、とつけた。いつかまた、輪廻の先で会えるように、と。

この子はきつと私を忘れないだろうから。

「この娘に比べれば、妾たちは花の命に過ぎぬ身。諸侯も身体に気をつけようぞ。妾たちは、この娘ほど強くはないのだから」

皆が静かに頭を下げる気配を感じる。

しかし、輪廻が目的なら…：なにも私、必要ないよねえ？

こんなにたくさんの人たち呼ばずに、こっそり来てくれればいいんじゃない？

うん、できないとは言わせないぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8012z/>

花鳥風月～花よりも華～

2012年1月4日11時45分発行